

## SJ Interview

## SJ インタビュー



下校する児童を見送る後藤さん

岐阜県垂井町立垂井小学校 校長  
後藤喜朗さん



## 「いつでも」「どこでも」「誰でも」実践できる 交通安全指導をめざすための提言

昨年、(公財)交通事故総合分析センターは設立 25 周年を記念して広く一般から懸賞論文を募集した。そして見事、最優秀賞に輝いたのが、後藤さんによる「世界一安全な道路交通社会の実現に向けた学校教育における取組」という論文である。

中学校の英語科教員であった後藤さんは岐阜県教育委員会での勤務を経て、昨年 4 月に垂井小学校に校長として赴任した。その直後に実施された交通安全の行事を見たことが、今回の論文を書くきっかけになったそうだ。「この行事には児童と教員だけでなく警察、地域の方々も参加して、地域ぐるみで児童の命を守るという姿勢を感じました。こうした交通安全指導を『いつでも』『どこでも』『誰でも』実践できるようにすることが、世界一安全な道路交通社会の実現につながるのではないかと考えたのです。最初は、学校での交通安全指導に対する私自身の願いをまとめるつもりで書き始めました。教員の立場からみたら、どれも当たり前で普通のことだと思います。ですから、最優秀賞になったと聞いた時は驚きました」と後藤さんは振り返る。

### 連携の仕組みを構築することで より系統的で充実した指導ができる

今回の論文の中で、後藤さんは同じ校区にある幼稚園・保育園、小学校、中学校(校種)が連携した交通安全指導の仕組みづくりを次のように提案している(右記参照)。

校種間の連携のポイントは、「幼児、児童、生徒間の交流」「教職員相互の交流」「指導計画の交流」「学習内容の交流」「教材の交流」といえる。

「垂井町では、私が赴任する以前から幼稚園・保育園と小学校とが日常的に交流しています。例えば、小学校の教員が幼稚園に出向いて授業をしたり、園児が小学校に来て、小学生のお兄さんやお姉さんと遊んだりしています。また、小学校の外国語活動と中学校の英語科で教員間の交流が積極的に行わ

れていますし、小学校と中学校を兼務している教員も増加傾向にあります。現行の取り組みをアレンジすることで、幼稚園・保育園、小学校、中学校の連携は可能だと考えています。連携の仕組みを構築すれば、より系統的な交通安全指導を実施することが可能になり、その内容も深めていくことができます」。

### 教員自身が交通安全への 理解を深めることが必要

各学校には独自の教育目標があるので、交通安全指導を実践する上でも教育目標と関連づけることが重要だと後藤さんは話す。「当校の教育目標は『心の豊かな子 やさしい子 かんがえる子 げんきな子』であり、『笑顔』と『感動』のあふれる『魅力』といった学校をキーワードとして掲げています。当校の場合は交通ルールやマナーを守って、安全に登下校することが児童本人や家族、学校の先生、地域の方々の『笑顔』を生み出すということを理解してもらう指導となります。そして、こうした指導の継続が『心の豊かな子』につながると考えています」。

さらに、学校で交通安全指導を実践するにあたっては、教員自身がその知識を身につけ、理解を深めることも大切である。そのため、校内研修の中に交通安全指導に係る内容を位置づけておくべきだと後藤さんはいふ。垂井小学校が毎年、全校児童を対象に実施している交通安全教室では同校の先生方が主体となり、道路の歩き方や自転車の乗り方の実技指導をしている。同校は交通安全教室の運営や指導に関する教育計画を作成し、交通安全担当の教員が異動しても、後任がスムーズに引き継げるようにしているのである。また、同じ通学路を利用する 1 年生から 6 年生までの班を編成し、班ごとで登下校している。下校時は各班に教員が付き添い、随時、交通安全指導ができるようにしている。「私自身もできるだけ校区内を歩くことを意識しています。クルマで通った時には気づかない通学路の危険箇所を歩くことで実感する

ことから、子どもに伝えるべきことがわかってきます」。

### 交通安全指導を核とした 魅力ある学校づくりに向けて

垂井小学校の児童は、子ども見守り隊や登下校のボランティアなど多くの人々に見守られている。同校ではこのような地域の方々に感謝をする会を開き、交通安全指導について、ともに学び合う機会として位置づけている。後藤さんは地域の方々から児童の良い行動を見かけたら、小学校に連絡してもらいようお願いしている。「信号機のない横断歩道を渡ろうとする子どもが歩行者保護のために停止したクルマのドライバーに、帽子をとって頭を下げて挨拶していたということも地域の方から教えていただきました。この時は校内放送で子どもたちにも知らせ、挨拶

したという行為によって、ドライバーの方へ感謝の気持ちを伝えることができたという意味づけもしました」。

このように、交通安全指導を核とした魅力ある学校づくりに後藤さんは日々取り組んでいる。「子どもの命を守り抜くことが、私たちにとって最大のミッション。交通安全指導においても、決して妥協することがあってはならないのです」。

Honda でも、幼稚園・保育園、小学校、中学校と各年代別に教材プログラムを作成し、普及を行っているが、校種間の連携という広い年代としてのとらえ方はなかったため、このような考え方は今後の年代別教材開発のヒントになると考えている。

※後藤さんの論文をはじめ、(公財)交通事故総合分析センター設立 25 周年記念懸賞論文は以下のホームページで閲覧が可能。  
[http://www.itarda.or.jp/ws/essay/h29\\_keisai.pdf](http://www.itarda.or.jp/ws/essay/h29_keisai.pdf)

## ●校種間の連携による交通安全指導

### ①交通安全指導に係るカリキュラムの交流

校種間で交通安全指導に係るカリキュラムを共有することで、互いの学習内容を確認することができる。特に、どの学年でどんな交通安全指導を実践するのかを交流することで、既習事項を見直したり、学習内容の重なりがないように確認したりする絶好の機会となる。一方で繰り返し学習内容を指導することでより徹底を図ることもできる。

### ②保護者参観を活用した交通安全指導に係る授業公開

校種間での日常的な交流をめざし、保護者参観等の機会に交通安全指導に係る授業交流を行い、幼稚園・保育園、小学校、中学校の教員が見合うようにする。保護者の方にも交通安全指導に係る学校の取組を知っていただく機会となり、家庭や地域でも同じ構えで交通マナーや交通ルールを指導していただくこともできる。

### ③教職員相互の出前授業の実施

小学校の教員が幼稚園・保育園で、幼稚園・保育園の教員が小学校で、小学校の教員が中学校で、中学校の教員が小学校で出前授業を行う。

### ④校種間を超えた合同授業の実施

幼稚園児・保育園児と小学生、小学生と中学生が共に楽しみながら交通安全について学ぶ合同授業を位置付ける。例えば、交通安全に係るクイズや標識当てクイズを中学生が小学生に出題するという方法がある。また、小学生が幼稚園・保育園児に対して交通マナーや交通ルールに係る寸劇を行ったり、人形劇を行ったりすることもできる。

### ⑤校種間の合同の研修会の開催

夏季休業などの長期休暇を活用し、幼稚園・保育園、小学校、中学校の教職員対象の交通安全指導に係る合同研修会を位置づける。講師には、警察や交通安全協会の方、地域の登下校の見守り隊の方に依頼する。校種を超えて合同で研修会を開催することで交通安全指導に係る願いを共有することができる。